

## 地震と沈んだ島の伝説

東光 博英

本年3月11日に起きた東日本大震災の津波が町を呑み込む映像には、世界中の人があまりに無慈悲な自然の猛威を目の当たりにして言葉を失ったに違いない。かつて西欧では1755年にポルトガルの沖合を震源とする大地震が発生し、首都リスボンが激震とその後の津波や大火で壊滅した。地震がキリスト教の祭日「万聖節」に起きたことや被害の甚大さはヨーロッパ全体を震撼させ、ヴォルテールやカントなどの哲学者にまで思想的な変化を与えた。今回の地震で想起されるのはやはり阪神淡路大震災である。よく利用していた阪神高速が横倒しになった姿は衝撃的であった。あの頃メディアが約400年前に近畿地方を襲った慶長伏見地震（1596年9月5日）との関連性を報じていたのを覚えている。京都の伏見城が倒壊して多数の人が圧死し、豊臣秀吉が仮屋住まいをした地震である。ところで、その前日に遠く離れた大分県の別府湾でも大地震があったことをご存知だろうか。加えて、その数日前の9月1日にも愛媛県で大地震が起きた。すなわち西日本の中央構造線上に並ぶ形で、5日間にマグニチュード7級の地震が続いて三つも起きたのである。特に目をひくのは別府湾の地震で、「沈んだ島」の話が伝わっている。それは「瓜生島」という別府湾に浮かぶ島であった。伝説によれば、島は1000戸の家や多くの寺社で栄えていたが、古くからの言い伝えがあり、島民は仲良く暮らさねば神仏の怒りを買ひ、その証拠に島の蛭子社の神将の顔が赤くなって島が海に沈むとされていた。ある時、一人の不心得者が神将の顔を赤く塗りつぶしたところ、本当に地震と津波が起きて島は沈み多くの人が亡くなったという。今日、大分県民なら大抵この話を知っている。もっとも島が実在したかについては諸説あって定かではない。しかし、瓜生島海没を述べた古記録はある。地震から103年後の1699年に戸倉貞則が著した『豊府聞書』（現存せず）と、ほぼ同じ内容と見られる『豊府紀聞』である。これには1596年9月4日（文禄5年閏7月12日）に瓜生島が地震に

より沈んだと記されている。これ以前の記録に瓜生島の名は見られないが、戸倉は同島が別名「沖浜町」と称されることやその地理的な位置を述べており、これが古くから実在した海港「沖の浜」とほぼ一致することから、「沖の浜」が本来の名前であったと考えられる。1500年代に来日した外国人の記録にも瓜生島の名はないが沖の浜への言及はある。特にポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、沖の浜に住むブラスという日本人信者の証言から震災の様子を詳細に伝えている。例えば、「豊後で起こった地震は非常に大きくて恐るべきものであり、…或る夜突然何ら風にあおられぬのに、その地へ波が二度三度と（押し寄せ）、非常なざわめきと轟音をもって岸辺を洗い、町よりも七ブラサ以上の高さで（波が）打ち寄せた。このことはその後、或る非常に丈の高い古木の頂上によって知られたことである。そこで同じ勢いで打ち寄せた津波は、およそ千五百（歩）以上も陸地に浸水し、また引き返す津波はすべてを沖の浜の町とともに呑み込んでしまった。これらの界限以外にいた人々だけが危険を免れた。それにしてもあの地獄のような深淵は、男も女も子供も雄牛も牝牛も家もその他いっさいのものをすべていっしょに奪い去り、陸地のその場には何もなかったかのようにあらゆるものが海に変わったように思われた」（1596年度日本年報補遺）と。「7ブラサ(septem cubitis)」は約14mに当たるので、別府湾岸にそれを超える津波が押し寄せたことになる。高い木によって波の高さを知ったというのも最近の震災報道からすれば真実味がある。フロイスは他にも佐賀関など沿岸の5ヶ所が冠水したことや由布院で山崩れが起きたことも述べているが、日本の記録と一致する。沈んだ島の伝説は地震後に作られた虚構かも知れない。だが、たとえそうだとでも現実に起きた震災を元に行っていることは確かだ。作り話と笑うよりも過去からの伝言、警告と受け取りたい。東日本大震災では869年に東北地方に大津波を起こした貞観地震の研究が防災に活かされなかったことを悔やむ報道があった。天災に関しては、どんな史料も民間伝承も軽んじてはならないし、情報を都合良く解釈することも慎むべきであろう。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)